

小学校英語における自己決定理論を背景としたプロジェクト型学習の効果 — 「英語学習不安」と三つの基本的心理欲求に与える影響 —

学籍番号 219218
氏名 中西 洋平
大学院主指導教員 柿 慶子
大学院副指導教員 庭山 和貴

1. 背景

1.1 小学校における英語教育の現状

2020年度より小学校新学習指導要領が施行され、小学校における外国語教育は大きく変わった。新学習指導要領では、これまで5年・6年生で行っていた外国語活動を3年・4年生で行い、5年・6年生では算数や国語と同じように教科として外国語を扱うこととなった。こうした変化に伴い、現場で外国語を教えている教員も「どのように英語を教えればよいか」など、不安を抱えながら授業を行っているのが現状である。筆者も小学校で英語専科として勤務しているが、そうした悩みを抱えながら日々授業実践を行っている。特に、英語を「話すこと」に対して不安を感じる児童がどの教室にも複数名おり、どのようにサポートすれば良いのか悩むことが多かった。学校実習で感じたこうした課題が本研究の出発点となっている。

1.2 課題及び研究の目的

本研究では、上述した背景から、児童の「英語学習不安」を軽減させたり、児童の「動機づけ」を高めたりするにはどのような授業実践をすれば良いのかという課題を設定した。その課題解決のために着目した理論が自己決定理論の枠組みの中にある「基本的心理欲求理論」である。この理論は、「自律性」「有能性」「関係性」への欲求を満たせば満たすほど、動機づけが高まるとされる理論である。この理論を日々の授業に応用するために用いた教育的介入方法がプロジェクト型学習である。本実践研究では、この教育的介入が「英語学習不安」や「基本的心理欲求」にどのような影響を与えるのかについてその効果を検証している。

2. 実践内容と研究の結果

2.1 教員へのインタビュー調査

この調査の目的は、小学校英語教育に長年携わっている3名の教員に対して、英語の授業において、どのような動機づけ方略や「英語学習不安」軽減のための工夫を実践しているかを調査し、筆者の授業実践の向上に繋げることである。得られた結果は、どの先生方も英語を使う「目的・場面の設定」に工夫を凝らしており、この工夫が授業づくりの大前提になるということがわかった。また、「英語学習不安」を軽減させる方略として、「学び合い」という概念を抽出することができ、これらの結果は、先行研究とも一致するものであった。この他にも、「聞くこと」などの各技能別の指導方略も概念としてまとめることが出来た。

2.2 児童への「英語学習不安」に関する自由記述による調査

この調査は、児童が授業中にどの場面で不安を感じるのか、またその理由や対処方法について明らかにすることを目的とした。この調査を通してわかったことは、「英語学習不安」を感じる場面に関して、「みんなの前で発表する時」がもっとも多く、次に続くのが「英語を話す時」であり、英語を話すことが児童にとって、最も不安が生じやすい場面であるということが明らかとなった。不安を感じる理由に関しては、「間違ってしまうかもしれない」や「人前で話すことに緊張する」などが挙がってきた。児童が不安を感じた時に取る対処方法に関しては、「周りからのサポート」を挙げる児童の数ももっとも多かった。これらの結果は、後のプロジェクト型学習の枠組みを利用した授業づくりにも反映させている。

2.3 自己決定理論を背景としたプロジェクト型学習の教育的介入

プロジェクト型学習とは、「ある特定の目標に向かって課題解決を行い、他者との関わり合い・協調を重視しながら、児童の主体的・創造的な学びを促す学習形態(東野・高島(2011))」と定義される。本研究では、このプロジェクト型学習を教育的介入方法として採用し、児童の「英語学習不安」や「基本的心理欲求」にどのような影響を与えるのかを調査している。

2.4 質問紙調査の結果

この調査では、「英語学習不安」が「有能性」や「英語学習肯定感」にどのような影響を与えているかを調べるとともに、プロジェクト型学習をする前と後では、児童にどのような変容があったのかを調べることを目的としている。まず実践前の調査では、「英語学習不安」が他の要因にどのような影響を与えているのかに関して、英語学習不安が高い児童ほど、授業中に積極的に活動に参加できる「自律性」や「やればできる」と感じる「有能性」が低かったりする可能性があることがわかった。一方で、「英語学習肯定感」に関しては、英語学習不安が高いグループと低いグループの間には統計的に有意な差は見られなかった。しかし実践後には、プロジェクト型学習の教育的効果に関しては、「有能性」に対する一定の効果が確認された。つまり、プロジェクト型学習を通して、「達成感」や「やればできる」と感じる児童の数が増えたと推察できる。

3. 総合考察

本実践研究を通して、児童が感じる「英語学習不安」が「自律性」などに与える影響はとて大きいということがわかった。この「英語学習不安」を少しでも軽減できるように取り組んだプロジェクト型学習であったが、質問紙調査からは、統計的に有意な軽減は確認できなかった。しかし、プロジェクト型学習を終えての児童の振り返りに「1人じゃ不安だったけど、班の人とできて良かった。失敗しても班の人がフォローしてくれた」などとあり、プロジェクト型学習が児童の「英語学習不安」軽減に寄与できる可能性も垣間見えた。また、質問紙調査で相関分析をした結果、「有能性」がどの要因とも高い相関関係を示していることがわかり、この「有能性」に対して、何らかの教育的介入をすることで、「英語学習不安」が軽減する可能性が示唆された。